

作文方程式

【初級編】

論説文 WHY 文用 テンプレートの使い方

論説文 WHY 文用テンプレート【初級編】の使い方をご説明します。

1. 方程式文の作成

1-1 下準備

まずは方程式文を作成しましょう。

方程式文というのは

「A は B である」

「なぜなら C だから」

「ということは D だよ」

という三行からなるシンプルな文章であることはすでに（論説文用テンプレートの使い方説明書の中で）説明いたしました。

しかし、WHY 文の場合、以下のように方程式文が若干変わります。

「A の理由は B である」

「その根拠は C だから」

「ということは D だよ」

通常方程式文をそのまま当てはめると B と C が同じものになるからです。求められている答えが理由そのものになってしまうからです。

以下、この WHY 文用変形方程式にもとづくテンプレートの使い方をご説明します。

1-2 問いの入力

はじめに問いを入力します。

The screenshot shows a dark grey interface titled "▼ 作文方程式" (Writing Formula). It is divided into three rows:

- 1行目 (Row 1):** Question: "A: 明らかにしたい問いはなんですか?" (What is the question you want to clearly state?). The answer box contains "問いを簡潔に記入します。例：文章が書けないのはなぜ?" (Enter the question concisely. Example: Why can't I write an article?). A red arrow points to the text "は" (wa) at the end of the question, with the label "問いを入力します" (Enter the question).
- 2行目 (Row 2):** Question: "B: それに対する答え（理由）は?" (What is the answer (reason) to that?). The answer box contains "答え（理由）を簡潔に記入します。例：問いが明確でないから" (Enter the answer (reason) concisely. Example: Because the question is not clear). The text "である" (dearu) is written to the right of the box.
- 3行目 (Row 3):** Question: "C: もっと詳しく言うと? (なぜそういえるの?)" (To be more specific, what? (Why can you say that?)). The answer box contains "詳細（根拠）を簡潔に記入します。例：文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である" (Enter details (evidence) concisely. Example: The pillar of the article is the question. An article needs a pillar. Therefore, to write an article, a question is needed). The text "だからだ" (dakara da) is written to the right of the box.

At the bottom, there is a button labeled "アウトラインを書き出す" (Start writing the outline).

一般的な論説文用テンプレートの使い方でも説明したように、ここにはあなたが問題にしたい問いが入ります。ただし、ここではその問いが「WHY（なぜ）」で始まる場合を扱っています。

なので、ここでは「なぜ～なのか?」もしくは「～の理由は何か?」という形式で問いを入力してください。

例文でいえば

文章が書けないのはなぜ? (「文章が書けない理由は何?」でもかまいません)

になります。

なお問いが複数あって、どれを選んだらよいのか判らない場合、一番重要な問いを入力してください。一番重要な問いというのは、文全体のテーマに関わる大きな問いです。それなしには文章が成り立たないような、全体を貫く柱となる問いです。

どれが大きな問いでどれが小さな問いなのかは、慣れないうちはなかなか判別できないかもしれません。そういう時は、どれでもよいのでまずはとにかく欄を埋めてみてください。それが適切か否かは方程式を埋めていく過程でみえてきます。

プロセスを進めていく過程でどうも適切でないと感じた場合、別の問いを入れて最初からやり直してください。

1-3 答えの入力

次は答えの入力です。

▼ 作文方程式

1 行目 A: 明らかにしたい問いはなんですか?
問いを簡潔に記入します。例：文章が書けないのはなぜ? は

B: それに対する答え（理由）は?
答え（理由）を簡潔に記入します。例：問いが明確でないから できる **答えを入力します**

2 行目 C: もっと詳しく言うと? (なぜそういえるの?)
詳細（根拠）を簡潔に記入します。例：文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である だからだ

3 行目 D: まとめると?
まとめ（課題や感想等）を簡潔に記入します。例：文章が書けないという人は、問いを明確にすることからはじめてみてはどうだろう だよ

アウトラインを書き出す

ここでは「なぜ？」と問われているのですから、その理由が答えになります。それを入力してください。

ここはそれほど難しくはないはずです。問いが明確になっていれば普通、答えも明確になっているからです。というより答えがわからないテーマについて書くことなどそもそもありえないでしょう。

注意していただきたいのは、ここでいう答え（理由）というのはあなたの意見だということです。

そのため、一般に結論が出ていない問いに対する答えは「理由はわからない」となります。この場合、理由がわからないことを前提に、どうすればよいのか、などと論じることになります。

※正確にいうと、この場合、「どうすればよいのか (HOW) 」が文章全体の問いになるはずですが。つまり、この「どうすればよいのか (HOW) 」が「大きな問い」に相当し、解決策についてのそれ（ここではWHYの問い）は「小さな問い」に相当します。すなわち、その場合、ここで書くのはWHY文ではなく、HOWからはじまる通常の論説文だということになります。

例文では

問いが明確でないから

になります。

1-4 詳細 (根拠) を入力する

次は詳細 (根拠) です。ここでは前段の答え (理由) をより詳細に説明します (もしくは根拠を示します) 。

▼ 作文方程式

1 行目	A: 明らかにしたい問いはなんですか? 問いを簡潔に記入します。例: 文章が書けないのはなぜ?	は
	B: それに対する答え (理由) は? 答え (理由) を簡潔に記入します。例: 問いが明確でないから	である
2 行目	C: もっと詳しく言うとか? (なぜそういえるのか?) 詳細 (根拠) を簡潔に記入します。例: 文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である	だから ← 詳細 (根拠) を入力
3 行目	D: まとめると? まとめ (課題や感想等) を簡潔に記入します。例: 文章が書けないという人は、問いを明確にすることからはじめてみてはどうだろう	だよ

アウトラインを書き出す

ここにはなぜその答え（理由）になるのか、「もっと詳しく説明すると？」「どういう根拠でそういえるのか？」という観点からその詳細（根拠）を簡潔に記入します。

例文では

文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である

とやや複雑な、三段論法のような形になっています。

論理が込み入ってくるとなかなかそうもいかないのですが、ここはできるだけ簡潔な表現にしてください。よけいな枝葉はばつさりと切り捨て、論理の骨組みだけを浮かび上がらせるようにしてください。

そうでないと論理の流れが見えにくくなります。論理の流れが見えなくなると、書いているうちに論理がねじれてしまう場合があります。論理がねじれた文章では、いくら巧みな表現を駆使した文章であっても説得力がゼロになってしまいます。

そうならないようこの段階でできるだけ明確な論理を組み立てるようにしてください。

この論理の組み立て方法については3の「論証方法を考える」でもう一度触れます。

なお根拠が複数ある場合、「その根拠は以下の通りだ」で始め、それらを箇条書きで列挙する形でもかまいません。

1-5 まとめを考える

次はまとめを考えます。

ここでは「問い」→「答え」→「論拠（詳細）」というそれまでの流れを受けて、「ということは～」もしくは「だから～」という形でまとめとなる文を入力してください。

▼ 作文方程式

1行目 A:明らかにしたい問いはなんですか？

問いを簡潔に記入します。例：文章が書けないのはなぜ？

は

B:それに対する答え（理由）は？

答え（理由）を簡潔に記入します。例：問いが明確でないから

である

2行目 C:もっと詳しく言うと？（なぜそういえるの？）

詳細（根拠）を簡潔に記入します。例：文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である

だからだ

3行目 D:まとめると？

まとめ（課題や感想等）を簡潔に記入します。例：文章が書けないという人は、問いを明確にすることからはじめてみてはどうだろう

だよね ← **まとめを入力します**

アウトラインを書き出す

まとめに入る内容としては、一般に「結論の再確認」「課題の明確化」「メリットの提示」「補足」「感想」「行動促進」「願望」などがあります。

例文では

文章が書けないという人は、問いを明確にすることからはじめてみてはどうだろう

と課題を明確にするとともに読者の行動を促す内容になっています。

以上で方程式文は完成です。

2. アウトラインを作成する

2-1 アウトラインの書き出し

次はいよいよアウトラインの作成です。

といってもこれはそれほど難しいものではありません。基本的には前のステップで入力したものをそのまま、もしくは若干肉付けして再入力するだけだからです。

ただし、ここには若干のコツがあります。それは

- 主語と述語を明確にすること
- 一文一意とすること

です。

またその際、修飾語など枝葉の部分はできるだけ削ぎ落としてください。「AはBである」という形のシンプルな文にするのがポイントです。

こうすることで文の骨格が安定します。骨格が安定すればあとで肉付けする際、枝葉となる語句を付け加えてもねじれのないわかりやすい文に仕上げることができます

なお前のステップで入力したものは自動的に反映されません。お手数ですが、コピー&ペーストなどでご対応いただければと思います。

さて指示通りに入力したら最後に「アウトラインを書き出す」を押してください。

▼ 作文方程式

1行目 A:明らかにしたい問いはなんですか？

問いを簡潔に記入します。例：文章が書けないのはなぜ？

は

B:それに対する答え（理由）は？

答え（理由）を簡潔に記入します。例：問いが明確でないから

である

2行目 C:もっと詳しく言うと？（なぜそういえるの？）

詳細（根拠）を簡潔に記入します。例：文章の柱は問いである。文章には柱が必要である。したがって文章を書くには問いが必要である

だからだ

3行目 D:まとめると？

まとめ（課題や感想等）を簡潔に記入します。例：文章が書けないという人は、問いを明確にすることからはじめてみてはどうだろう

だよな

アウトラインを書き出す



そうするとアウトラインが表示されます。

これでいったん作業は完了です。

お疲れ様でした。

2-2 肉付けする

ここであらためてアウトラインを読んでみてください。

いかがでしょうか？

ぶつかりで表現もこなれていないかもしれませんが、いわんとすることの6割～8割は伝わる文章になっているのではないのでしょうか？

あとはそれを10割に近づけるだけです。そのための作業が「肉付け」です。

肉付けというのは、言葉を補ったり、別の言葉に変えたりして表現をブラッシュアップすることです。

どう肉付けするかは自由です。よりわかりやすい表現になるよう各自工夫しながら推敲を重ねてください。

なお具体的な肉付け方法についてはここでは触れません。文章の表現力を高めるノウハウ本はすでに数え切れないほど出版されていますし、ネット上にも同様のサイトがたくさんあるからです。

※正直いうと、私は表現力に関してあまり自信がありません。少なくとも皆さんに教えられるほどの表現力は持ち合わせておりません。恐縮ではございますが、表現力を高める方法については出版物やネット上のサイトなどに当たっていただければと思います。

代わりに、ここでは肉付けする際のヒントだけ記しておきます。

肉付けの方法には大きく分けて次の二通りがあります。

1、表現を膨らませる

言葉を補い、よりわかりやすい表現に直します。とくに意味が伝わりにくかったり、誤解を招くような部分は言葉を尽くしてきちんと説明します。

ただし文章はシンプルイズベストです。表現を手直した結果、かえって短い文になったとしても簡潔にしてわかりやすいのであれば、それがベストです。無理に膨らませる必要はありません。

2、情報を追加する

文章に肉付けする一番簡単な方法は情報を追加することです。それらを必要に応じて追加してください。ただしいうまでもありませんが、追加する情報は論旨に沿ったものでなくてはなりません。たんに字数を膨らませる目的で無関係な情報を混ぜ込んでしまっただけでは、論旨がわかりにくくなってしまいます。

また論旨に沿った情報であれば、それにふさわしい場所が必ずあるはずです。全体の論旨と前後の流れを確認しながら、ふさわしい箇所に追加してください。逆にふさわしい場所が見つからないのは、それが不要な情報である証拠です。そのような情報を無理に入れ込む必要はありません。